

# 学院のこんな人、あんな人

関東学院の学生や卒業生、先生方にスポットを当て、紹介します。さて、あなたはこの人を知っていますか？



プロサッカー選手  
日野 健人 氏

2012年に関東学院大学経済学部を卒業後、HBO東京による海外支援プロジェクトのサポートを受け、2014年2月にオーストラリアリーグの「USVヴィース」と契約。同年8月にモンテネグロリーグ「FKアーセナルティヴァト」に移籍。今シーズンもモンテネグロでのプレイを予定している。在学時は4年間、サッカー部に所属した。

## 海外に出て、何が起きても動じない精神力を持ちました

「学生時代から海外での生活を考えた」という日野健人さん。日野さんが関東学院大学を卒業する2012年に、社会人サッカーチーム「HBO東京」が海外支援プロジェクトを立ち上げました。それはまさに「渡りに舟」だったそうです。

「海外に出て、いろんなものを見てみたい。そして人間的に成長したかったんです。僕にとつてのサッカーは、海外に出るための手段だったのかもしれない。」

自分の気持ちを改めて確認するよう、当時を振り返る日野さん。そのしっかりとした口調に、揺らぎない志が滲み出ます。

「最初に生活したオーストリアは経済的にも豊かで、人々の感性も朗らかなものでした。良い人間関係も築けたし、居心地も良かったです。それに対し、8月からプレイしているモンテネグロは、旧ユーゴスラビアから分裂した国の一つ。未だ人種

差別や領土問題といった紛争の火種を抱えています。世界のさまざまな状況を見ることにおいては、この1年間だけでも手応えを感じていました。」

海外で活動していると、日本では考えられないようなことも起こるといいますが、日野さんは「その一つに、言葉の壁がある」と続けます。

「今のチームは監督、コーチとも英語が通じない。彼らが話すのはセルビア語です。ですから言葉が通じにくい分、僕はプレイで表現するしかない。練習から気を抜かず、姿勢を伝えていくことが大切です。」

普段からしっかりと相手の目を見て握手することを心掛けていたそうです。「海外に出るまで、コミュニケーションとは言語のことだと思っていましたが、言語以外にもコミュニケーションは取れるんです」と、まっすぐに答えます。

そんな日野さんですが、関東学院

大学での生活を振り返ってもらうと「いるいるな人と出会い、学んだ」と言います。サッカーの名門高校で過ごした高校時代は、縛られる時間が多かったそうです。

「それとは対照的に、大学では自分の時間がしっかりとありました。アルバイトをするのも部活に打ち込むのも、決めるのはすべて自分。将来の進むべき道も、真剣に考えることができました。僕にとつての学生時代とは、そういう大切な時間でした。」

決して順風満帆ではなかった学生生活。怪我に泣き、試合に出られない日々が続くこともあったそうです。そんな時に、サッカー部の監督から人間としての姿勢を教わったと続けます。「サッカー選手である前に、人間として一流であれ。」

この監督の言葉を今も糧にして生きている、と日野さんは語ります。なお、日野さんの活動は下記ブログから確認できます。

<http://ameblo.jp/austria7/> (日野健人ブログ「Next One」)



株式会社「Jロキ」代表取締役社長  
権田 浩幸 氏

関東学院小学校、関東学院中学校高等学校を経て、大学卒業後、広告代理店勤務。2008年「Jロキ」入社。2011年より代表取締役。13年「エチオピアのハイレミアム・テサレ」首相が来社。「エチオピアの材料や良いものをつかった日本で初めての会社」と高い評価を受け、14年安倍首相のエチオピア訪問に同行。エチオピアに縫製工場設立。

## 「塗り隠さないから現れる、本物の魅力」を世界に

お洒落で個性的なお店が並ぶ横浜・元町。なかでも、店頭に置かれた存在感のある赤いクラシックカーがひととき目を惹くお店があります。1952年創業の「Jロキ」。革製品のお店です。

社長を務める権田浩幸さんは、小学校から高等学校まで関東学院で過ごしました。元町の商店主にも、関東学院の出身者は多いんです。と権田さん。小学校のときは1学年2クラス。こちんまりしているの、誰でも顔見知り。先生との距離も近かったそうです。環境や価値観が似ていたの、とても過ごしやすかったです。今思えば、先生方の目も行き届いていましたね。

大学卒業後、東京で20年近く働いていた時、自分で何かやりたいと考え始めたときに「Jロキ」の現会長に誘われた、未経験の分野に飛び込みました。そして、2011年からは社長を務め、会社の先頭に立ち、活

躍しています。

「Jロキ」が扱っているのは、オリジナル革衣料、バッグや革小物、しかし、その製品には、明確なポリシーがある、と権田さんは言います。

「他のお店にはないものをつくっている、という自負があります。今、一番力を入れているのは、エチオピアシープという質のいい革を使った衣類です。現地につくった自社の縫製工場では、縫い手が一人で一着仕立てるといふやり方で生産しています。」

分業制が当たり前の縫製業界で、このやり方は効率や経済性を考えればありえないそうですが、こうすることで、縫製スタッフのスキルも格段にあがりますし、やりがいも生まれます。みんな一年もここで経験を積めば、洋服を一着仕立てる技術が身につきます、と権田さん。自社の利益だけでなく、現地のスタッフにもプラスになる方法をとる、そんな

真摯な姿勢がうかがえます。「エチオピア政府からも、技術を移植してほしい」と言われています。この事業をエチオピアに根づかせたいです。中国でも同様の考え方で自社工場を運営しているそうです。

「現地のスタッフ」といふ関係を築くことができれば、必ずいい製品が出来上がります。私たちが目指すのは大量生産ではなく、集中し、丁寧に愛情を込めてつくる製品です。エチオピアでの製品づくりの私たちの合言葉は、「世界一の製品をつくる」。

関東学院も、横浜から世界に羽ばたく人材を輩出したいと考えていると思いますが、それと同じでしょう。」

現在、国内にあるのは3店舗ですが今後10年かけて、海外も含めて23店舗にまで広がっていく、と権田さんは意欲的です。お店に立ち寄った際には、ぜひ、権田さんに声をかけてみてください。お待ちしております。